



久保宜明(くぼ よしあき)教授

皮膚科

- 1963年(昭和38年)生まれ
- 1988年(昭和63年)徳島大学医学部医学科卒業
- 2011年10月 教授就任

●専門分野[皮膚癌、遺伝病、脱毛症、アトピー性皮膚炎、分子生物学]

皮膚はカラダの鏡です

お母さんのおなかにいる胎児、赤ちゃん、小児から高齢者まで、全ての人の皮膚と粘膜(口腔、陰部等)に生じる病気やトラブルを診察し、それを解決する手段を考えるのが私達の役目です。最初の診察はまず講師以上の3名でおこない、皮膚科全員の検討会の後、それぞれの専門に分かれてチーム医療に取り組むようにしています。

他の病気の症状が皮膚に出ることがあり、「皮膚は内臓の鏡」と言われています。このことを常に頭において皮膚全体を診させていただきまします。皮膚がん、遺伝病など難しい病気の患者さんにとって、治療はもちろんのことその発症メカニズムの解明が、病気の正体を突き止める確定診断につながります。診療と研究の両方がしたかったこともあって、比較的それが叶えられやすいこの分野に進みました。難しい病気で困っている患者さんこそどんどん受け入れて、最後の砦となるのが大学病院の役割だと思っています。今後も治療研究を重ねて、徳島大学ならではの新しい治療方法を見つけ出したいと思っています。



西岡安彦(にしおか やすひこ)教授

呼吸器・膠原病内科

- 1964年(昭和39年)生まれ
- 1988年(昭和63年)徳島大学医学部医学科卒業
- 2011年11月 教授就任

●専門分野[呼吸器病学、リウマチ・膠原病学、臨床腫瘍学]

「コミュニケーション」そして「共感」

「共感」は学生時代から頭に残っている言葉です。医療の現場では、患者さんとのコミュニケーションが重要です。コミュニケーションを通じて「共感」が生まれ、そして信頼関係に発展することが患者さんに十分な医療を提供するための大切な要素であると思います。医療スタッフとのコミュニケーションも同じです。現在の医療において患者さんに良質の医療を届けるためには、医療現場のチームワークは欠くことができません。医師には医療スタッフとの間にも「共感」が生まれるような努力が要求されます。そして「共感」が「共鳴」となって動き始めることが、チームとして行動する大きな原動力であるように感じています。呼吸器・膠原病内科は、そのようなチームでありたいと思っています。一方、大学病院の強みも大きなチームであることです。呼吸器・膠原病内科はその一員として、患者さんや医療スタッフからたくさんの共感を受け続ける診療科でありたいと思っています。新任教授としての歩みは始まったばかりです。一人の医師として、そしてチームとして努力を続けたいと思います。ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。